

三川拳母記

三川拳母記

2932
三

三川拳母記

一冊



愛知縣
額田郡
辰原印

拳母記

冬河國拳母の事近記舊地や藤原貞氏郷衣の里乃橋
花と詠しと地裏ひを亭若年の以まけ白ひ橋乃詠とて
権造し何今於子守の社内ふき橋を移し権造とて
拳母といなる文字乃始ハ風古記に昔年拳河の事
衣川乃ありとて其しき鴨の子一羽遊下は水下に
各一羽遊りて近くと見し程又子鴨を並し程と
内は抱えけ乃森に入ると見し程又子鴨を並し程と
何とてと記宣何して後又母をハ遠々天へやると見し
此故又拳母と云はる後け愛又社と道管し吾年を建
たぬ男守明神と何の事かお禮毎事九月十九日は鴨
ハ九月十九日初と申す事乃方へ流す程の事いやは
と賀茂郡三石の村初と申す川下に於鴨村川上とて
磐石村何ふ事其謂はるん事案したる拳母の事
織田家の臣系隠はる丹波の事云流あきとて
不審し拳母ハ三石侯始とて築城何とて寛永年

A2932

42764
40598

中を寛文初年以て多城居たり同田第一得替
何れを跡廢地となり田畑反米能返して其時御代官
香山平助反交配たり其年征の月十日郡
の土居の内は七ヶ所の村ありて作らざりし古堀
埋り田となりて其時より童も奥をふし古堀
平父初行すはけり天和元年に奥別白向を
本多侯年領となり廢城乃古堀を後へ傳へて
遠く尾浦と唱ふは傳多も其間凡六十一年征也
寛延二年又遠列相良へ得替何れも其時
内及後神領地新築の
台命を承りて城郭既に在りしを以て其物換り
里移り前より大河に居りて其年より其の度
とにありて水きり入して其水患限りして止り
と傳へし其 台命を承りて其今の城地一引取せ
し事なまらや以曆年体より迄宮年体まで其
衣と書しや天和元年より其の年母の字を改

此のなかを多揃るに金谷又古跡跡何れを古乃奉
母城をいふん又給と云ふ村に屬す正中年中中條後前
承長平治は長興寺處に於て乃奉母の郷に其今
里畑の南に下の官畑の字と名を本町中町の何れ
まゝに在しや下の文跡水者寺觀音跡其外廢
寺の跡三は橋迫は色に何れか
中條後前正年中か石如意寺後京とてしとする
御代に如意寺昔も有しゆ
◎高橋乃乃と号する其始の事矢代橋もあはれ其
梅坪村川中の糸天の地は流石高文橋何れも橋
卷に似たり山石は河りて人あきても年久し
るがもいふいふは待りたり何れも思掛
るがもいふいふ
◎お守明神の事是森勝はけ三明神は流石乃奉母
の流石乃草創は仁孝の年とていふは祥なりん
本多能野を其奥州へ流石乃流石を其の流石
冬河も其の事也や其州流石河も討死す

を向ふと云ふしと世説の語より傳へり
書にいと云ふは世説の語より傳へり
又しよ遠かしの後には善縁猿投の語堂造管とし
奉母右三社社氏勅請かしこ今猶云三社並に
は故又び三社の語野の語神也して道必又三類の神
名形し然野をすまき保人にして三類神を敬りや
みたりあ守りたるの社地は古くも易地なり
何れも靈験ありと云ふは古くも言傳へり又神主も
いとの伏せや語あるを名あるや彼らもあはれ有
六代とんの神主居宅夜申も居動せしめ何れ起り
つんせに大地三外と云る巻を語又内へいんせし
繪を以て突又心服指を振る突いへ起り夜に
は血乃流せしと云ふいんせに前後の叙り内り
きり置て古井ありと云ふは死をり里人七八人も
集りてあひ川へ持りて持しり云傳へり云
○勝子の社神は従古乃奉母と云り社跡塚ありと云り

陸地や上りよ子守の社跡塚ありし
をい里人唱る下の語と唱り神号あり河下
まると云り畑の字なり河り實父年申る山牛助殿交
能と常今の下林乃地へ移せしりや也も亦社の語
常世月の小宮と云る如本あり旧地の名は常世或は
○昆布の社神は従古乃板下は河り今跡一木残り
社跡陸地や又三度見地河り今跡地は北へ移り
是れハ業原なりし子守跡も各業原如本流し又昆布
に業原なりしと云ふ當り據るふは是ハ西所出り又本志
けり今所は長業原と云り業原則昆布の社神は
業原なりしと云ふ其語を以て今所は長業原也
云はる三業原揃ひしと云ふの語は長業原も今ハ小板の
南へ易地なり
○那岐の社神は古くも今所の地は陸地なりし
神の町と名ける事考へる是は古社社跡なり
是又社の名業原ありと云り

若菜八幡宮の地は古茂社とすて外は社地もすなり
 南町の横大の神の地は古茂社とすて外は社地もすなり
 神事神名帳に載る如野の水患を陳す城南の山一易
 地は旧地前通り 三侯侯の地大子の門をす東川の
 押す大子の地をすて諸人住す地也南町入口に
 予知町の地すく左右大より社地なり南町の地す
 南町として大道の地なり又八幡旧地の西は隣りて徳の畑
 あり十よりすは不敷る筋は依りて十王堂ありし也
 又一よりすは後十王の神事す居地へ川あり延字に
 ます八南町を大の町とす
 天神乃社元東町地へ近き古茂社の地す南町の地す
 牛助殿支配の地古茂社九年道場山へ易地をすは山
 山後天神山と號すを城中にありし也移其地を
 奉納る社あり及俳諧十百歌あり
 古三姓奥刻正宗庵住し人よりすあり

洞泉寺ハ霞溪山と号す中町に在り檀越も多し
 古茂社や或は社地をすて八幡社とす富め人徳堂を加し
 説も何れ社地をすて八幡社とす富め人徳堂を加し
 寺々和神地也一易地を信堂再建成就せり
 浄久寺小地なり山年御友の宗附ありしやあり
 陽音寺ハ元東町を村より近きとす後元東町へ遷し
 神事神名帳に載る如野の水患を陳す城南の山一易
 地は旧地前通り 三侯侯の地大子の門をす東川の
 押す大子の地をすて諸人住す地也南町入口に
 予知町の地すく左右大より社地なり南町の地す
 南町として大道の地なり又八幡旧地の西は隣りて徳の畑
 あり十よりすは不敷る筋は依りて十王堂ありし也
 又一よりすは後十王の神事す居地へ川あり延字に
 ます八南町を大の町とす
 天神乃社元東町地へ近き古茂社の地す南町の地す
 牛助殿支配の地古茂社九年道場山へ易地をすは山
 山後天神山と號すを城中にありし也移其地を
 奉納る社あり及俳諧十百歌あり
 古三姓奥刻正宗庵住し人よりすあり

○長真寺の住持雲地也五山唐福寺函山師一圓師の弟子
方道和尚より弟子大陽和尚古良實相寺住持職となりし
を招いて長真寺建立門内の塔中十七院とすへり寺
領も河原邊又後津も西門逢川へ向ひし地を絶庵橋といふ
橋を加へまゝを金谷とすし城まを並通ふして城と寺との
間を以て城下所と爲しなり水音寺讃川の觀音三十三名所の
観音中修後寺前寺の
みづの山城の住持寺
より信事と云寺後には智願寺を元東所のわが敷し寺久し
くハ樹木一様を以て長真寺の伽藍とも謂ふ大龍寺といふも
昔年戲田の兵亂のさるまゝ乃爲り焼也して一時燈臺となれ
り寺かまけわい苦道とす北殿司名画敷く一り寺準禪師
の法眼とるものなり寺長長之暮ハ寺の前より五輪や又境
内より勝河とたのしし

願王閣 二竜松 慈眼堂 圓覚場 絶塵橋
洗衣石 貝多林 般若臺 通海井 金剛窟

○元南所出口田畔に一村の村あり湯谷松と云人なり湯
しと遠くや湯谷松と云しと云へしと云松と云二三十東
より寺中知中には瘦寺の住持なり女僧住職とすいびる湯

谷藤松の後ともしあり居しと云説河原旧趾の畑は三十年
程前までハ古き松一本あり畑の字あり依り考ふる雲の寺を
かゝりて又長真寺涅槃像表を寫すとの名ありけり寺
女僧ありと事ありや應永八年辛丑信判白幹縁比立義隆と云
猿投祇事馬三近の住持より奉母城王住持保城王と云出
しあり暗評讀見たり保中絶く人なり奉母より古刹の如
祇馬一足七度用一足流隔馬一足踏の右三足又掛坪村の
一足出右三足の内祇馬一足を大房と唱へ遠く馬の名園の
やに覚へたりと云掛坪に覺永十一年御上洛の時城主
三宅侯大房を免やれ供奉あり後小寺皆具を接投祇
事馬に寄附し候侍あり後より一足を大房と唱へ京
そのかゝる祇事住持のさるまゝハ平大房の江東きあり
なりと掛坪し事や

○此の地はと云所なり古より或は昔年猿投祇事の祇馬
の死ありと云理あり地やと云黒説河原と云説は説は
○元東町のい今の水門の始りぬ古川と云田也なり又元

田と云へり予按き亦に正保二年乃大水の事切入梅坪村
内子居在し然し雲岩寺前流き急るう保りしんた
丈ゆへに古川の川由の言名も阿多や又雲岩寺を石彪
と云号も阿多や

◎三宅候城主をくしめ御下所を武者修りと言ふ坊主入
る言とくくも色うりれい寛政年中天章殿七お中にも烟甚五
と信と著とや一丈山月道退急けしは梅坪村境めく
追有聲とかひまに谷りやハ着さ士のい居さ原の情し
命を周と喉喉とふと万合道く切急れ大竹の村の内
仕也の力を振拂ひ斬り殺しし侍買つとまう後さふ人
同たの士五共は踏色坊主を切殺り堀主と云は人の神神也
烟甚五と信に傳きける活かぬと尋又恋心流と備子婦の人や
考き保力三丈の御まう梅も右中推しむて又まあるる予
の人中と考しうと或方かなを田原へ得習熟ある予あ贈
らましや

◎是より前又奉母法と云の阿多予按は是の天和申 本後

の後の以記しは是の如くし撰中には奉母の古義も
◎延宝年中申すハ川をくして高き堤と云は乃このもなる
しと云山本御殿のんか阿多と云東所曲天のよ且堤と云
築きぬとい川系新田と名は若し事のなし甚堤築御渡
長の流き多父印年の以んて是へくると物何まうまま
ハ川をく低くせ板をり川へ出さみみへくつれまらて以
まらハ川に御せ低く事なむりしと云

◎近世所く大水の事永三百年享保十六亥年是より予
九事の時おく是へり宮曆七五年付信東所南町民家現
街市に梅の坂へ板の宮曆十三亥年以和二年以和四亥
年より名は和年申にむく言中かかじも毎夜助助敷
稜をさして怪衣一人もすけ外敷十夜のもの疑奉て算
へてやのまの祥も云ふし

◎衣の集り載る衣の里の和歌方のことし
白妙の歌のよれきふ乃乃
衣の里ははらばも阿多

藤原仲正

之帰ち成りては人様も如 藤原 貞氏

衣の里に白くはくはくも 藤原 忠隆

さうもさう衣の里のむらぬを 中務

夜をさう袖みやりぬや都ら 為盛

ふとちりる衣の里にきくはり 二村山をたししてあをまは

○子守乃白ひ様お題しり登 待て他懐思の情をさく

左よ記を女子をけをんぬ

題櫻花 白櫻花 霞映和光子歳尚存 神殿傍為是播

神頭祿村春風吹送 舊時香

右北若舟の寛永年中申を予家世にけ地を指して

古老の物語りとして傳へしを著者さうの思

齡改ま古稀はけりるまの物を見くやくぬ 心事

お遠く趣も何んよれはほかなし 皆さうの後の人皮

寛政六甲寅年四月既望 水田 道輝 祀

白山社ハ元東町南石橋の原ヨ一里ノ今ハ吉如山ハ馬地

本北佛ハ長興寺ト云ハ説ハ河津ノ説ナリ

○寛永十癸酉年我山子東行日録

出地鯉鮒行末幾馬兒遙指示云自此北一里許八橋之陳迹

也今作農耕之田地而無社若之澤唯以田間有小流處傳其名

而已

歌仙名未消社若久枯周澤亦為田無由認八橋

又行可里有矢矯宿昔武尊東征時未干此而作矢故名云有

橋長二百間許建武年中足利新田戰干此而足利敗走之所也

今古俗々矢矯河曾間建武挫形也長橋影入河房融

是亦何竜卧水波

今日晝自心午困出高子夜宿于赤坂郵亭有教妓茶見之詰同行
云仁治海道能載大江定基未決所依遊女之別發心出家
矣遙居美色之感人也如此彼樂天假色真色誠可懼焉宋
朱文公宿相潭見胡澹庵戲和借之詩而又題壁自警云世
上無如人欲險幾人到於誤平生由自一念之於海道驛宿遊
君妓女自官有之於今亦然嗚呼行路難不在水不在山祇在
男女色欲之間乎危哉同行無頭聞而嘆之於是乎作二詩書
之壁以發宿者之鑑戒云

赤坂郵亭憶定基遙居美使人危行難不啻山河
險須鑑前賢自警言詩

